

○ 小中一貫校か義務教育学校かについて

【教育方針・教育課程の視点から】

- ・切磋琢磨できない、多様な考え方に触れることができない、クラス替えができないといった単級の学校や小規模校の課題を解消するため、小中一貫教育を瀬戸市全体で取り組み、9年間先を見据えながら、教育活動を進めている。上市町においても、同様の背景があることや、現在取り組んでいるふるさと教育や外国語教育、インクルーシブ教育等を生かすことを踏まえ、9年間を見据えた特色ある小中一貫教育を進めていくことが大切である。
- ・施設一体型による小中一貫教育は、分離型の小中一貫教育に比べ、一貫教育の充実を図ることができ、R2年度当初800人の児童生徒数がR5年度には1,100人へと著しく増加している。大手企業のベッタウンという環境に加え、施設一体型の魅力ある小中一貫教育は地区の活性化につながる。
- ・基礎基本の定着や中1ギャップを解消するために乗り入れ授業が行われており、中期課程(小5~中1)ではTTで授業を実施している。教員の免許によって担当学年の偏りを防ぐために、中期課程のTTにおいてはどうしても中学校教員を中心にせざるを得ないといった状況がある。乗り入れ授業は、児童生徒の理解の定着や、二人体制によって児童の安心感につながり、大きな成果があるが、小中一貫校の場合、県から配置される連携教員によって、毎年乗り入れ授業の実施可能教科が異なることや一部の教員に負担が増すこと、学校の方針に合わせた教育活動を実施できないといった課題があることが分かった。学力向上や中1ギャップの解消、教員の配置や研修体制、教員の負担軽減の視点から、1校として教員が配置される義務教育学校が、円滑に、かつ充実した教育活動を実施できる。(瀬戸市においては、全小中学校において、小中一貫教育を推進する立場から、一体型のにじが丘学園のみを義務教育学校として特別な一貫教育を行う学校として設置することは、成果等が明らかでないことや他校区との調整、今後の他地区の統廃合に関わることから踏み切れなかった背景がある。)
- ・前期・中期・後期課程の各学年4~5学級の児童生徒が1、2階のフロアで一緒に学習をしていた。ノーチャイムでの実施、2限、4限、5限、清掃の時間を合わせることで、45分授業の小学校の教育活動と50分授業の中学校の教育活動に支障がないようにしていた。小中学生が一体型の校舎で学ぶことについて、教育課程上大きな支障はないようであった。

【生徒指導の視点から】

- ・不登校児童生徒の対応については、市全体で「ここほっとルーム」を設置するなどの対応をしている。9年間先を見て今何ができるのかを考えて取り組んでいることはとても素晴らしいと思った。しかしながら、小中一貫校であるため、保護者には小学校と中学校で情報を共有していくことをその都度説明し共通理解を図っている点においては小中一貫校の課題であると思った。

※ 以上のことから、三条市の義務教育学校と、瀬戸市の小中一貫校を視察し、教育課程や生徒指導の面からは、義務教育学校が望ましいのではないかと考える。ただ、義務教育学校のデメリットである「小学校高学年のリーダーの減少(育ち)」については、学校行事や特別活動の在り方の検討を十分に行う必要がある。また、「教員の多忙化」と「校長1名による校長の負担軽減」に向けての人材配置等への対応、新たな学校体制に向けての教員の理解も進めていく必要があると考える。

瀬戸市立にじの丘学園 視察報告 (白井委員)

地域の沿革として、瀬戸市小学校適正配置計画が2003年に策定され再編の計画がなされたが進展はなかった。2017年(平成29年)から開校準備に入っている。5つの小学校の児童数が予想より著しく減少しクラス替えができない、2つの中学校の部活動が成立しない状況になり、新たな小中一貫校を設立することになった。

平成28年当時は義務教育学校が隆盛ではなかったこと、瀬戸市内全域が義務教育学校に向かうことが予算や立地の関係からできなかったことから小中一貫校としたとのこと。

小学校と中学校の連絡先は別々で、にじの丘小学校・にじの丘中学校の名称を用いる場合もある。校長はそれぞれにいる。しかし、拝見した限りでは、学校運営上は義務教育学校に準ずるものであると考える。職員室は一つになっており、校内の教員研修(教科研修)も小中一緒に開催しているとのこと。小中が同居しているのでノーチャイムで日々の時間割が運行されているが、給食・清掃等の要となる時刻が揃うよう配慮されている。

学校設立に向けては、設立前から県から小中一貫推進教師が学校に加配されてコーディネートを行っている。教員配置にもよるが、専科教員として5、6年生に理科・算数・体育・英語の中学校教諭が乗り入れ授業を行ることが容易になっている。

児童生徒の通学には路線バスを利用している。より通学に適したようにルートや時刻等を配慮してもらうため、1家庭当たり年間数千円の出費があるが、逆にそれだけで済むようにしてもらっている。

特筆すべきこととしては、周辺環境と調和し、歴史と伝統を居ながらにして感じることでできる充実した校舎であり、児童生徒が落ち着いた様子であること、教育活動で瀬戸焼等の伝統を取り入れた特別なカリキュラムが実施できることである。

また、児童生徒数が開校当時より増加していること、校内の図書館等を地域住民に開放できること等で、新しい学校が核となり、地域住民が増え、住宅地の活性化につながっていることが分かった。ただ、地域が栄えるまでには至っていないと感じた。

学校の立地状況は、野球場や公園予定地を転用し、さらに隣接した中学校跡地のため、自然あふれる開けた敷地になり、グラウンドも広々としている。校舎も基本は2階建てであるが、吹き抜けの中央階段が中央にあることですべてが一体化して感じることに、廊下が100mトラックのように広くつながっていることで、異学年間の交流が簡単に行えるようになっている。